

講義ノート (7)

モロッコ調査 (その1)

こんにちは。今日はモロッコについてお話しします。モロッコは私にとってもっとも身近で、かつ長い付き合いを持っている場所です。初めてモロッコの地を踏んでから50年近く、つまり半世紀が経つわけですから、その間にはじつにさまざまなことがあり、またさまざまな人たちとの関係が展開しました。それを逐一お話しすることは到底無理ですので、ごく概略だけご紹介しようかと思えます。たとえ名目上は単目的の調査であったとしても、そこには「前史」に相当する雑多な人間関係の絡みがあり、その後も別の調査に影響を与えてゆくことをご理解いただければと思います。フィールドワークというものが決して時間と空間を区切られたものではないということです。

さて、半世紀に及ぶモロッコとの付き合いを振り返ってみるということはこれまでやったことがなかったので、今回あらためて記録を見直しながら整理してみました。以下のように、計19回ものモロッコ滞在がありました。途中比較的長いブランクがある場合と、2000年のように年間3回も行っている場合などさまざまですが、ほぼ毎年のように行っていたんですね。しかし後のさまざまなフィールドワークの出発点となったのは、なんとといっても「(2) 1985.2.-1987.11.」の約3年弱だったことは確かなので、今日はそのときの話が中心になると思います。

- (1) 1974.10. 赤坂小町の旅
- (2) 1985.2.-1987.11. 日本大使館専門調査員
- (3) 1994.8-9. <アフリカの音文化>
- (4) 1994.12-1995. 1. <ユダヤ廟巡り>
- (5) 1995.8 <ユダヤ廟巡り>
- (6) 1995.9-10. 諸事
- (7) 1996.7. 諸事
- (8) 1997.2. 諸事
- (9) 2000.2-3. 諸事
- (10) 2000.6-7. <シェフショウエン音楽祭取材>

- (11) 2000.12 <広島市大交流協定>
 - (12) 2003.8-9. <音楽調査>
 - (13) 2004.8. 諸事
 - (14) 2005.8-9. 諸事
 - (15) 2006.8-9. <音楽調査>
 - (16) 2006.10-11. <外務省 ODA 評価調査>
 - (17) 2008.7-8. 諸事
 - (18) 2010.8-9. 諸事
 - (19) 2013.8-9. <音文化調査>
-

話の振り出しは第2回目でお話した「赤坂小町の旅」になります。その旅でモロッコを通ったとき、首都ラバトに入る手前のケニトラという町で、道路で検問していた憲兵隊に問答無用で訳もわからず留置場に連れて行かれて、数日間ぶち込まれるという、なんとも腹立たしい経験をしました。細かいことは省きますが、我々4人が最初にぶち込まれ、その翌日どこかのおばさんを含む7~8人の日本人が送り込まれてきました。しかしそのほとんどは一晩だけで釈放されたのですが、我々は最後まで残されたのです。釈放された人たちのうち4~5人はどうやら青年海外協力隊でモロッコに派遣されていたようですので、当然彼らは釈放されたら「まだ日本人が残っているから助けてやってくれ」と日本大使館に通報してくれるものとはばかり思っていたのですが、待てど暮らせど音沙汰なし。次の日だったか、我々を除いて最後まで残っていた若者（アメリカ人の彼女と二人で旅行中だった）が釈放されることになり、彼がラバトで日本大使館に連絡すると言ってくれました。その言葉通り、翌日の夕方だったか、大使館から助けが来て、我々もようやく釈放と相成ったのです。もしあの若者が通報してくれなかったら、我々はいつまで拘束されていたかわかりません。

我々の腹立たしさの対象がモロッコ政府だったのはいうまでもありませんが、それ以上に悔しかったのが、先に出ていった協力隊員たちでした。助けに来てくれた大使館員に「協力隊から連絡がありましたか？」と聞いたら、「何もありませんでしたよ」との返事。なんということ！ 外国に長逗留している日本人（大使館員や企業駐在員など）が日本人旅行者をバカにしたり厄介者扱いしたりするのはいろいろところで経験済みでしたが、「協力隊よ、おまえもか」という情けなさが後味の悪さを残しました。「日本人同士なら仲間だ」と思うことが如何に浅はかだったかを思い知らされ、以後そうしたつまらない幻想は抱かないことにしました。

なおだいぶ後になってからわかったのですが、我々が勾留された理由は、当時、モロッコ最大の都市カサブランカ（もしかしたら首都ラバトだったかな？）で開催されようとしていたアラブ首脳会議（通称アラブ・サミット）に備えての予防拘禁だったようです。というのも、この頃（1974年）はレバノンに拠点を置いた日本赤軍が世界中で事件を起こしていて、

そのため治安当局は日本人の若者、特にグループに対して神経をピリピリさせていたらしいんですね。ついでに言うておきますが、治安側の姿勢とは対照的に、アラブ世界の庶民のあいだには日本赤軍への共感や好意が根強くあったように思います。とりわけ、アラブ諸国が束になってもかなわなかったイスラエルの中心部に乗り込んで行ってイスラエル人をたくさんやっつけたコーゾー・オカモトはヒーローだったといってもよいかと思います（ロッド空港乱射事件、1972年）。

ともあれ散々な印象から始まった私のモロッコ経験ですが、それから約10年後には、ちょっと大袈裟かもしれませんが、私の人生を方向付けるような3年間をそのモロッコで過ごすことになりました。首都ラバトの日本大使館で初代の専門調査員という仕事をするようになったのです。専門調査員というのは、現在では（社）国際交流サービス協会というところが語学試験などを課して嘱託職員として採用し、在外公館に派遣することになっていますが、1980年代はまだ制度の初期段階だったため、外務省が一本釣りで人材を探していました。私の場合もある人の紹介で急遽モロッコに行くことになったのです。まだ大学院に在籍のままでした。当時在外公館はどこも人手不足が深刻で、外務省としてはどんな名目でもいいから人手を確保したかったと聞いています（笑）。そんなわけですから、当時の外務大臣安倍晋太郎（今の安倍首相のお父さん）の名で発行された委嘱状を携えてモロッコに飛んだのです。委嘱内容は「モロッコにおける部族構成とその内政に及ぼす影響に関する調査研究」というものでした。もちろん私が出したテーマです。

ラバトに着いてみると、受け入れる日本大使館のほうが一戸惑っていたようです。なにしろ「専門調査員」なんてのは初めて聞くポスト名で、何をやってもらったらいいかかわからないというのが本音だったと後日聞きました。まして発行されたパスポートは公用旅券といって、JICA（現国際協力機構）や協力隊などに発行されるもので、外交旅券が発行されるいわゆる外交官とは違うのです。さぞかし扱いに困ったことでしょう。そこでさっそく大使と相談ということになり、業務割合としては調査半分、館務（＝大使館の業務）半分ということで合意しました。館務としてはとりあえず広報担当ということになりましたが、繁忙時以外は調査に軸足を置いてよしという了解を得ました。そしてモロッコ政府から「レセ・パセ」（通行許可証）というものを発行してもらって、これで正々堂々とモロッコ中を好きなときに歩き回ることができるようになったのです。他の国に派遣された専門調査員の話聞いてみたら、私の場合はずいぶん恵まれた待遇だったようです。当時の大使と参事官の配慮には今でも感謝しています。なお任期は2年でしたが、1年延長可能ということで結局3年弱滞在しました。館務に関しても興味深いことは数々ありましたが、守秘義務があるようなので触れません。

さて昔話をくどくどするのは本意ではありませんので、この3年のあいだにやったこと、

特に「報告」に結びついたこと（つまりフィールドワークに相当）をかいつまんで紹介しておきます。あ、その前に1つだけ。モロッコはチュニジアやアルジェリア、リビア、モーリタニアなどとともに「マグレブ」（＝西アラブ）と呼ばれ、エジプト以東の国々「マシュリク」（＝東アラブ）とは同じアラビア語といっても話し言葉としては東北弁と九州弁ほども違うため、またマグレブはほとんどがフランスの植民地だったため外国語としては英語が通じずにフランス語がメインであることから、日本人の研究者（専門分野を問わず）は敬遠することが多かったことを付け加えておきます。最近ではフランス語アレルギーはだいぶ解消されて、研究者の数も増えてきましたが、それでもなお中東研究とかイスラム研究といった場合には、研究者数も研究業績数も圧倒的に東アラブ中心であるのは変わりません。

～ブジャドの町から～

首都ラバトから南に車でザイール街道という田舎道を約3～4時間走ると、タドラ平原と呼ばれる平地の真ん中にブジャドという町があります。まずそこに行ってみることにしたのは、アメリカの当時若手人類学者のアイケルマンという人が10年ほど前にこの町を舞台とした本を書いている（Eickelman, Dale F. *Moroccan Islam: Tradition and Society in a Pilgrimage Center*. Texas: University of Texas Press. 1976）、その現場を見てみたいというミーハー的な動機からでした。ひじょうに面白い本だったので、モロッコに行く話がある前にすでに熟読していましたが、だれかがすでに調査して民族誌を著している場所を再訪するというのはスケベ心に他なりません。本のイメージと実際とはどのくらいかけ離れているのかなあ、という好奇心があったのです。

アイケルマンとの縁をここでちょっとご紹介しておきます。彼は私より10歳ほど年上なので兄貴分といった感じですが、じつは私がモロッコに赴任する直前、彼が出版した『*The Middle East: An Anthropological Approach*』（1981）という本を日本語に翻訳しようという話を、私の大学院の先輩だったエジプト研究の大塚和夫さんから持ちかけられていました。私がモロッコへ行くということが急遽決まったので私は降りることになり、その後大塚さんが一人で訳して出版しました。『中東—人類学的考察』（大塚和夫訳）（岩波書店、1988年）という本です。もう古くなったとはいえ、内容としてはまだ十分価値がありますので、皆さんの中にもし中東の人類学的研究を目指される方がいれば、ぜひ入門書としてお読みになることをお勧めします。良書です。

そんなわけで因縁浅からぬものがあったとはいえ、そのときはまだ私はアイケルマンには会ったこともなかったもので、興味津々でブジャドの町に向かったのです。行ってみると大して変哲もないふつうの田舎町だったのですが、それがかえって興味を引きました。ここは

「シャルカーウィー教団」というモロッコ有数の有名なイスラム教団の本拠地で、町の中心部には創始者シャルキーをまつる立派な廟もあるのですが、そのこととこの町の変哲のなきのアンバランスが妙に気になったのです。

さてここからは偶然の話になるのですが、町の郊外に小さな聖者廟が幾つも集まった場所があって、そこを何気なく訪れて、管理人に水を飲ませてもらったのですが、それをきっかけに彼と意気投合して、以来彼が亡くなるまで（1999年）の長い付き合いが始まりました。彼の名前はラディーといって、家は市内にあり、私はブジャドに行くたびに彼の家か彼のお父さんの家に泊めてもらうことになりました。彼の管理する廟では「ハドラ」や「ズィクル」という一種の憑依儀礼がおこなわれたりするので、それらに参加したり、また廟のすぐ脇で年に一回真夏の猛暑の中で大規模な聖者祭がおこなわれたりします。聖者祭のときにはふだんひっそりとした町が急に活気づき、大変な賑わいを見せます。このアンバランスが面白かったのです。ふだん一見するとそのまま通り過ぎてしまうような小さな町が、じつは地域の人たちにとってはひじょうに大きな意味を持っている。夜になって路地裏を歩いていると、家々から漏れてくるオレンジ色の窓明かりに混じって、静かだけれどなんともいえず落ち着いた唱名が流れてきたりして、モロッコの他の町には見られない独特の雰囲気があるのです。聖地というのはこういうものなんだと知った次第です。



左からラディー、長女、長男、私
(1987年、廟の前で)

ラディーからはいろいろなイベントの情報をもらただけでなく、彼の紹介で周辺の農村をまわって部族のことや農業のこと、商売のことなどを聞いたり、ときには彼と一緒に車で30分ほどのベニー・メッラルという町へ出かけて悪い遊びをしたこともあります。ある日の明け方、突然彼にたたき起こされたことがありました。奥さんの弟が病院で亡くなっ

たというのです。私は自分の車を持っていましたから（大使館員の条件の1つです）、彼を乗せて一緒に病院に駆けつけ、死亡診断書をもって役場に行き、一方病院から家に遺体を運ぶ救急車（霊柩車はありません）を手配し、通りがかった知り合いに墓の穴掘りを依頼し、それには身長を測らなければならないというので再び病院に引き返して遺体の身長を測り、亡くなった義弟の家に行ってグスル（遺体洗浄）の準備をしたり、イフラーム（遺体を包む巡礼着）を買いに行ったり、教団幹部のイマーム（導師）に連絡したり（家と墓地でコーラン朗唱を先導してもらう）、と町の中を行ったり来たりで大忙しでした。そして挙げ句に「あとで遺体を家から墓地に運ぶとき、遺体をおまえの車に乗せてくれ」というので、「それだけは勘弁してくれ!」。ふつう通りの葬式行列になり、私も文字通りお棺の片棒を担いで歩きました。その日の昼過ぎには埋葬も終了し、あっという間の出来事でした。なお余談ですが、この日以来町の中を一人で歩いていても子供たちから「シノワ、シノワ」とはやし立てられることがなくなりました。「シノワ」はフランス語で「中国人」。見知らぬアジア人は皆シノワになります（アラビア語ふうになまって「シヌウィー」もあり）。また近隣の村々に一人で行っても不審がられることもなくなりました。最初は訝しく思われることもしばしばでした。葬式は大勢の人が集まりますから、この葬儀が結果的には私の存在のお披露目になったのかもしれないね。聖者祭のとき、何人かの知らない人から親しげに声をかけられたりしましたが、きっとこの葬儀のときに会った人だったのかもしれない。

なおブジャドでの調査結果については、モロッコのイスラームの概要説明とともにラディイーの廟でおこなわれた憑依儀礼の詳細を日本民族学会（現日本文化人類学会）の機関誌に書きましたのでご覧ください《堀内正樹 1985 「モロッコのイスラーム—聖者信仰の概要と事例」『民族学研究』50巻3号。日本民族学会。pp.322-333》。また3年連続で見ることができた聖者祭の詳細な分析を日本中東学会の機関誌に載せましたので、これもお読みになってください。ちょっと読み応えがあるかと思います《堀内正樹 1989 「聖者シャルキーの祝祭-中部モロッコのムーセム（聖者祭）について」『日本中東学会年報』4-1、日本中東学会。pp.1-43》。

あ、そうだ、アイケルマンのことを忘れていましたね。ともかくブジャドに入り浸るようになってからはアイケルマンの本のことはほとんど思い出せませんでした。論文を書くときにはもちろん使いましたが、現場のイメージが全然違っていたからです。ちょっと考えれば当たり前なんですが、第1回目の授業で言ったように、世の中に同じことは二度と起こりません。アイケルマンがブジャドで過ごした1970年前後と私が過ごした80年代とでは当然時代も違いますが、そんなどうでもよいことよりも、彼が付き合った人たちと私が付き合った人たちが全然別ですから、たとえ同じ町であっても全然別の経験世界が展開するのは当然です。ですから彼の記述も事実ですが、私の記述も事実です。事実はたくさんあってよいのです。別の人ブジャドに行けば、また別の事実が生まれることでしょう。「あの人

が書いたことと私が見たことは違うじゃないか」というのはナンセンスです。私が上記2つの論文を英語の抄訳と一緒に後日彼に送ったとき、手紙にそのようなことを書いたら、彼も同意してくれました。アイケルマンとは、その後私が専門調査員を終えてから何度か会いました。ひじょうに穏やかな紳士ですね。彼は大塚和夫さんと深い信頼関係を築いていましたから、2009年に大塚さんが亡くなったときも彼は大塚さんのご遺族のもとを弔問に訪れ、そのとき私も同席させていただいたことがあります。それ以来会っていませんから、時の経つのはあっという間ですね。

アイケルマンで思い出したことがあります。こういう授業ですから、ちょっとした脱線の裏話も許してもらえらるでしょう。アイケルマンはシカゴ大学でクリフォード・ギアツという超有名な文化人類学者の下で学びました。そのギアツが1986年の1月頃だったと思いますが、モロッコの古都フェズの最高級ホテルに人類学者を十数人集めて、1週間にわたってワークショップを開いたことがあります。アメリカはカネがありますね！ そのときアイケルマンはいませんでした。日本からは民俗学の宮田登さんや人類学の小松和彦さんといった大家も招待されて参加しました。私はまだ一介の大学院生でしたからとても参加などできる身分ではありませんでしたが、小松和彦さんは私の大学院の先輩でもありましたから、向学のためと思っラバトから駆けつけてのぞき見させてもらいました。まあそれはそれでいいのですが、このワークショップにポール・ラビノーという、ギアツ門下の若手人類学者が参加していました。ラビノーはすでにモロッコのフェズ近郊のセフルーという町でのフィールドワークの経験を綴った民族誌を出版して（Paul Rabinow, *Reflections on Fieldwork in Morocco*. University of California Press, 1977）、日本語の翻訳も出ています（『異文化の理解—モロッコのフィールドワークから』岩波現代選書、井上順孝訳、1980）。翻訳が出たときには日本でもそれなりに取り上げられ、実験民族誌の旗手として結構話題になりました。私は英語の原文のほうをいち早く読んでいたのですが、どこかしっくりこない違和感をはじめから感じていました。ギアツ一派というのは現象学的なアプローチで有名なのですが（ギアツを有名にした「Thick Description（厚い記述）」という概念はその最たるもの）、ラビノーも現象学的社会学で用いる「問主観性」という概念を前面に出して本を書いたのです。しかし本を読んだ時点では、理論はともかく、ちょっとファンタジーみたいだという印象を拭えなかったのです。そこでせっかく直接会う機会ができたのだからと、どんな人なのか興味津々でした。で、私はこのワークショップのあいだに、会場となった最高級ホテルの給仕さんたちの控え室でタバコをふかしていると（日本大使館もゲストをよくこのホテルに泊まらせていて、私は何度かその案内係もしていたので、ホテルの内部はよくわかっていました）、ある給仕さんが「あの人の言っていること、よくわからないんだよね」とい

って眼で示すので、見たらそれがラビノーでした。どうやらアラビア語で給仕さんに何か注文したらしいのだけれど、それが何を言っているのかわからないということだったようです。同じようなことがフェズ市内のカフェでもありました。ワークショップの参加者たちが息抜きに町へ出て、旧市街のとあるカフェに入り、ラビノーはまだ若手だったのでみんなの注文をまとめ、店の親父さんに伝えたんです。ところが親父さんになかなか注文内容が伝わらず、結局親父さんがフランス語で聞き返してようやく一段落。この人は本当にアラビア語ができるのだろうか。少なくとも一年か二年はこのフェズの近くで暮らしたはずなのに。彼の本がファンタジーみたいだったわけがわかった気がしました。たぶん地元の人たちとはほとんどアラビア語ではコミュニケーションがとれなかったのでしょうか。

フィールドワークの「報告」である民族誌には、信頼性の有無がやはり付きまとうと思います。嘘や捏造が書いてある民族誌はめったにないと思いますが、たとえ「事実」が書かれているとしても、いったいその民族誌にどれだけの信頼が置けるかというのは別問題です。その文章なり記述なりが生まれてくる背後にどれだけの経験があるのか、それが見えてくればしめたもの。それは「フィールドワークの経験」ではなくて、「残余経験」の質だといってよいでしょう。良質な残余経験の有無が文章の信頼性を左右するのだと思います。それは文章を読んだだけではすぐにはわからないかもしれませんが、自分でも文章を書いてみると次第に見当がついてくるものです。「これだけのことを書くには、裏にかなりのベースとなる経験があるな」とか、逆に「偉そうなことを書いているけど、ほとんど何もわかってないな」とか。

*なおラビノーの話になったついでに、ここで「実験民族誌」について触れておきたいと思います。実験民族誌は文化人類学全体の潮流の中でも、モダンからポストモダンへと向かう重要な転換点をなした動きなのですが、それを担ったアイケルマン、ラビノー、クラパンツァーノ、ドワイヤー、ローゼンなど、当時の若手の英米系人類学者たちのほとんどがモロッコでフィールドワークをおこなったのです。それが何を意味するのかは今でもよくわからないのですが、つまりモロッコという風土と人がそうした動きを創り出すなにか特徴を持っているのか、あるいはギアツの影響を受けた同じような志向を持つ一群のグループがたまたまモロッコに集まっただけなのか。ともかく彼らが何を目指したのかを簡潔にまとめた私の文章がありますので、それで理解してみてください。ここで説明するよりもわかりやすいと思います。当時流行だった「オリエンタリズム批判」と一緒に説明しているので、理論的なことに関心のある方は読んでください《堀内正樹 1995 「実験民族誌とタバカート-モロッコにおける二種類の記述」 『民族誌の現在-近代・開発・他者』(合田涛・大塚和夫編)、弘文堂。pp.158-178》。関心のない方はスルーして

いただいて結構です。若者の熱気が横溢していた時代だった気がします。

さて話を戻しましょう。ブジャドでの調査は専門調査員の仕事が終わるまで、断続的に3年間続きましたが、それでおしまいとはなりませんでした。その後もモロッコへ行く機会に、毎回ではありませんでしたが、時間があるときにはブジャドのラディーのところを訪れました。ところが、何回目だったのでしょうか、2000年の2月に訪れたとき、いつものようにまず彼の管理する廟に顔を出すと、奥さんのマリカが駆けつけてきて開口一番「なにやっていたんだ、遅いよ」と泣き出しながらいうのです。「去年の11月に死んじゃった」というのです。呆然として声も出ませんでした。ラディーは私と同年くらいだったので、若すぎます。病気だったそうです。そのまま市内の自宅に行き、マリカの用意してくれたタジーン（モロッコの日常食の肉や野菜の煮込み料理）を長女のスィルワや西サハラでの軍役が終わって戻っていた長男のムハンマド、お喋り娘のハナーンなどと一緒にいただいたのですが、子供たちがいつの間にかみんなこうして大きくなって、元気でいたのが救いでした。居間の壁には、かつて私が撮って現像して額に入れて進呈したラディーと家族の大きな写真が掛けられていました。もうこれでブジャドとの縁も切れるのかなあと落胆しながら帰途につきました。

ところが縁というのは不思議なもので、私の中でそれまで予想もしなかった新たな関心が、かつてブジャドで録音した一本のテープから芽生え始めたのです。そのきっかけは同年（2000年）の6月から7月にかけておこなった、シェフショウエンのアンダルシア音楽祭の取材でした。シェフショウエンというのはモロッコ北部の山間の町で、かつてスペインの植民地だったこともあって地中海風のエキゾチックな雰囲気醸し出し、2010年にユネスコの無形文化遺産に指定されてからは町の一部をどぎつい青色のペンキで塗りたくるようになって、それが良いとあって今では日本人も含む多くの外国人観光客を集める有名な場所になっていますが、この頃はまだそれほど注目を集めることもない地味で落ち着いた町でした。その町で、毎年アンダルシア音楽の楽団がモロッコ各地の都市から集まり、一大音楽祭を開いていたのです。

アンダルシア音楽というのは、かつてイベリア半島南部のアンダルシア地方で花開いたイスラム諸王朝の宮廷音楽で、12～15世紀頃のレコンキスタによってイベリア半島から追い出されたアラブ人やユダヤ人が北アフリカにもたらしたものです。モロッコではその音楽伝統が今日まで継承・発展され、国家を代表する音楽としての位置を占めています。ひじょうに洗練された華麗なステージ音楽ですので、私は専門調査員時代からその存在は知っていましたが、具体的に接触する機会はありませんでした。それが撮影クルーを伴った本格的な総合取材をしようということになったのは、シナイ半島での調査仲間の縁です。シナイ調査のところでちょっと触れた西尾哲夫さん（言語人類学）が大阪の万博公園にある

日本の文化人類学/民族学のメッカである国立民族学博物館（通称「みんぱく」）に勤めていて、そのビデオテークの資料収集活動の一環としてなにかよい取材対象はないだろうか、という相談があったのだと記憶しています。そしてやはりシナイで一緒にいた民族音楽学の水野信男先生なども交えて話しているうちに、水野先生もアンダルシア音楽とは浅からぬ縁があるし、私堀内もモロッコには詳しいからということで、ではシェフショウエンの音楽祭の総力取材をしてみようかということになったのです。水野先生は若い頃アルジェリアからモロッコへと音楽の旅をしたことがあって、その際にフェズで今はもう亡きモロッコを代表するアンダルシア音楽界の重鎮だったアブドルカリーム・ラーイスのお世話になったことがあったのだそうです。そんな偶然の成り行きで、西尾さん、水野先生、私、それからシナイ半島の「旧巡礼路踏査記」を書いた小田淳一さんの4人と、みんぱくの撮影クルーを加えた総勢8人くらいで約一週間続いた音楽祭の完全取材を敢行しました。



シェフショウエンの遠景（まだ町は青くない！）



アンダルシア音楽祭の会場

さてそこで、この取材と私のブジャドでの録音がどう関わってくるかという話なんです。それは取材が終わって帰国し、ビデオテーク用の番組を編集するために取材で記録した大量のビデオを見直していたときのことです。どうもどこかで聞いたことのあるような妙に懐かしいメロディーに遭遇したんです。いろいろ考えているうちにハッと思い当たったのが、かつてブジャドのラディーの廟でおこなわれたズィクルという憑依儀礼のときに聞いた特徴的なメロディーだったのです。ずっと気になっていたメロディーだったんですね。というのもそのメロディーは長い長いズィクルの合間に挿入されたちょっと異質な短いメロディーで、ズィクルの熱狂を沈静化させるような効果を持っていたからです。そのときのズィクルの録音は90分のカセットテープで6~7本ありましたから、その中から当該

部分を探し出すには当時一苦労しましたが、見つけることができました。

ところがこれとシェフショウエンの音楽祭で記録された曲とは、よく聞くと違うことが明白でした。雰囲気だけ似ていたんですね。でも、まさか泥臭い田舎の憑依儀礼と洗練された舞台芸術であるアンダルシア音楽が結びつくはずはないというのがそれまでの私の思い込みでしたから、もしかしたら無関係ではないかもしれないというのは衝撃だったわけです。そこでそれを確かめるためにアンダルシア音楽の勉強と調査を本気で始めたのです。2003年の<音楽調査>では水野先生と一緒にフェズまで行って、かつて水野先生がお世話になった故アブドルカリーム・ラーイスの後を継いで今ではモロッコナンバーワンの地位に上り詰めているお弟子さんのムハンマド・ブリウエルという人に会いに行きました。そして旋法のデモンストレーションを頼んで録画し、また私の数々の質問にも根気よく答えてもらいました。2006年夏の音楽調査では、やはり水野先生と一緒にサフィーやアガディール、マラケシュなどの都市の音楽院を巡り歩き、多くの情報を得ました。この2回が音楽を前面に出した調査で、音楽専門家の水野先生を頼りにしてのものでした。他の調査のときも、私単独で何人かの音楽家を訪ねたりしました。なおブリウエルさんにはその後2010年にも、ラバトで彼の楽団がラマダーン（断食月）コンサートのトリを務めた際にお会いしました。

そして私なりに理解したアンダルシア音楽のしくみを、2010年にまとめて文章化したので、音楽に関心のある方は読んでみてください《堀内正樹 2010 「アンダルシア音楽のしくみ」『アラブの音文化—グローバル・コミュニケーションへのいざない』（西尾哲夫・堀内正樹・水野信男編）、スタイルノート。pp.112-131》。（音楽に関心のあまりない方はスルーしていただいても結構です）。この文章は私と西尾哲夫さん、水野信男先生の共編による13人の研究者の論文を集めた論集に収録されているものですが、この本は東洋音楽学会の田邊尚雄賞という学会賞を受賞しまして、こう言うてはなんですが、日本では最高水準の本格的アラブ音楽の解説書だと自負しています（ドヤ顔!）。なおアンダルシア音楽の実際の映像や音についてはYoutubeでたくさん視聴できますから、「Andalusian music」「Morocco」などで検索してみてください。

さてこうして10年近く遠回りした結果として、ブジャドのメロディーはどうなったか。答えを見つけました、それはブリウエルさんのデモンストレーションの記録ビデオの中にあつたのです。この2つの音は長い時間を越えて、複雑でスリリングなプロセスを経てむすびついたのですが、その間の物語は、これも自分で言うのはおこがましいのですが、感動的ですらあります。その詳細を2015年に発表しましたので、音楽に興味のない方も読んでいただきたいと思います。イスラームが教義や理論や思想やプロパガンダや政治や宗教やあるいは議論のネタとしてではなく、感性の問題としてどのように生きているのか、その姿を知りたい人には参考になるはずです《堀内正樹 2015 「小さなメロディーが開く世界—モロッコ」『<断>と<続>の中東—非境界的世界を遊ぶ』（堀内正樹・西尾哲夫編）、悠書館。pp.297-326》。

こうしてみると、1985年にブジャドのラディーの廟で拾った小さな種が、その後ラディーの死も乗り越えて、じつに多くの人たちとの偶然の出会いやさまざまな出来事や場所とくっついたり離れたりしながら、30年後に結実するわけですから、これはもうフィールドワークがどうのこうのという枠は越えているといっぴよいでしょう。

ついでにいっぴおきますが、この発端となったブジャドのズィクルの、問題のメロディー以外の主要部分に私は当初の関心があったので、他の幾つかのイスラム教団のズィクルと比べてとき、そこにシャーズィリー系という系列の教団の特徴があることに気づいていました。そしてそのシャーズィリー系のズィクルを、まったく想定外の、遠く離れたシナイ半島の山奥の祭りで聞いたときの驚愕を、授業第5回目の《堀内正樹 1993 「シナイ半島で知ったこと」『人文論叢』51号、二松学舎大学。pp.230-231》という短いエッセイの後半に記しました。世の中というのは本当に面白いものですね。

今日は気がついたらブジャドの話だけで一杯になってしまいました。次回もモロッコの話の続きをやります。

おわり